

すべての思い出の狭間で

高校入学とともに家族で八王子に引越して、二十代の前半までそこで過ごした。

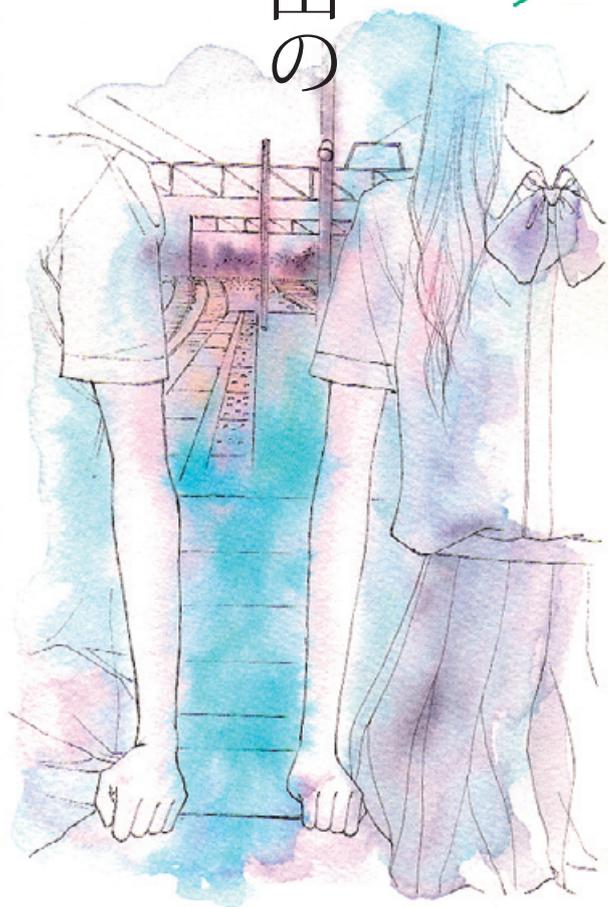
新宿から丸々一時間、京王線の「めじろ台」が使用駅だった。両隣の駅名は「山田」と「狭間」。宅地造成した京王線がいかにも「めじろ台」などというこじやれた名前をつけようとも、その場所が山の中にいることは一目瞭然だ。住宅地はとうぜん高台にあり、公園の一角から市外が一望できる。うっそうとした山がすぐそこに見える、寺や畑の多い郊外の空気は、私自身ののんびりした性格を培うのに一役買ったと思われる。

高校は「めじろ台」からさらに西へ進んだ「高尾」駅からスクールバスで登る月夜峰つきよみねにあった。二駅、たった四分の列車通学だ。しかしこの四分が四分で終わらないところに、青春というものの存在

意義がある。

そのころ私は若干早めに家を出て、坂道を下ったり上ったりしながら駅にたどりつき、各駅停車の鈍行に乗っていた。もちろん通勤快速に乗るなどという手段を、青春は許さない。通勤快速はお隣の「狭間」をすつとばして「高尾」に着いてしまう。それでは意味がないのだ。なぜならお目当ての彼の通う高等専門学校は、「狭間」にあるからである。

彼は東のほうから通ってきて、「北野」で鈍行に乗り換えて「めじろ台」までやってくる。示し合わせた車両で落ち合い、私たちはたった一駅の邂逅を楽しむのであった。なんというすばらしい朝。



イラスト・岡林玲生

「めじろ台」——「狭間」間はわずか二分であるから、しだいに私たちにはもどかしく感じられるようになった。短すぎる。もつと時間が欲しい。

そこで私たちは少しだけ早起きをして、少しでも早い鈍行をつかまえることにした。「狭間」に到着しても、彼は降りたりしない。列車は高校生を乗せて、「狭間」を過ぎ「高尾」に着くが、私も降りない。とうとう終点の「高尾山口」までたどり着き、ほとんど誰もいない観光地のプラットフォームで、いまだにもう思い出せないわいのない話をひたすらいつまでも続ける。そうして、折り返しの列車が動き出すのを待ち、ようやく

上り線が運ぶ二度目の「高尾」駅で、私は彼にさよならを言う。彼も二度目の「狭間」駅で降りて学校へ向かうのだった。私たちの淡い交際が終わるまで、この無駄に時間をかけた列車通学は続いた。

朝早く起きる意味をまったく見出せなくなった女子高校生は、とたんに遅刻魔に変身した。「すみません。起きられませんでした」と、ぼさぼさの頭をして言い訳する生徒を前に、「誰より学校に近いところに住んでいるのにこの醜態はどうした」と、担任の眼鏡の先生は呆れた顔をする。しかし、遅れて入ってくる空ろな目をした女生徒の思いは、教室にも校庭にもなかつた。甘い後悔とともに、失くしてしまった時の「狭間」を彷徨さまよっていたわけである。



文・中島京子

Kyoko NAKAJIMA

1964年東京生まれ。東京女子大学文理学部史学科卒。雑誌編集者、フリーライターを経て2003年『FUTON』で小説家デビュー。主な著書に『イトウの恋』『平成大家族』『女中譚』などがある。5月末に文藝春秋より最新作『小さいおうち』を上梓。